

## 「手習い」イギリス文化論

第8回

## ～音楽からみる日常と非日常～

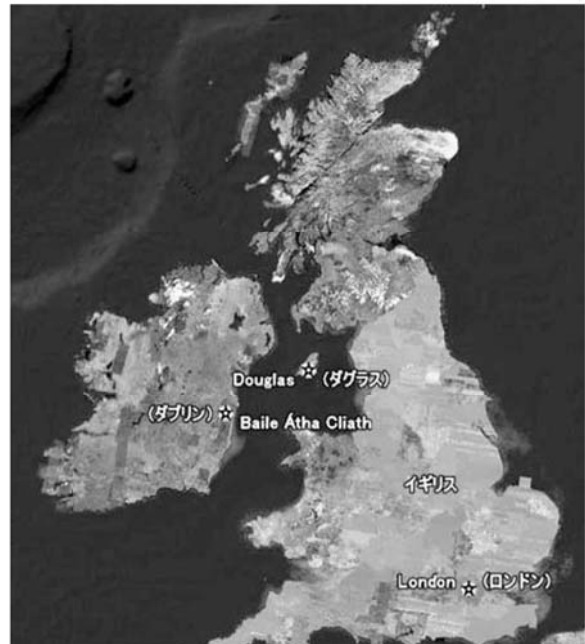
北海道大学創成科学共同研究機構  
明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

まだ、アイルランドにいる。前回の違い探しの旅の続きである。ダブリンでの二日目。朝早くに電車でダブリンの南の海岸沿いの街を訪れたあとで、ダブリンに戻り、インフォメーションセンターでもらったリストの中から、市街の中心部にあるアイリッシュ音楽で有名だというパブを選び、行くことにした。

邂

逅



## 小林 国之(こばやし くによき) 氏

- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程後期課程修了(博士(農学))  
その後、北海道大学大学院農学研究科研究員を経て
- 2004年4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園大学酪農学部所属)
- 2007年4月 北海道大学創成科学共同研究機構 明治乳業「乳の価値創造研究」  
寄附 研究部門 博士研究員

### ◆主な著書

『『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防』(株)日本評論社 2005年

夕方というにもまだ早いような時間である。アイリッシュパブと音楽は切っても切れない関係にあるらしい。アイルランドの出舎町では、パブに集った人たちが、それぞれ気の向くままに楽器をかき鳴らし、それに合わせて踊るのだ。人々が集まると、音楽が自然発生するらしい。

アイリッシュ音楽はギター、フィドル(バイオリン)、フルート、イーリアンパイプと呼ばれるバグパイプの一種、パウロンとよばれる太鼓が奏でる、四分の四拍子、八分の四拍子などのリズムに乗った音楽である。軽快なリズムは、自然と人々の心を踊らせるのか、アイリッシュ音楽はいつもダンスを伴う。馴染みのあるところでは、映画「タイタニック」で主人公のジャックが、上流階級出身のお嬢様であるローズを三等船室に連れ込んだ時に繰り広げられていた、歌と踊りの狂乱の光景がそれである。

さて、私が目指しているパブは観光ガイドにも載っている。きつと地元の人々が集うようなパブとは違う、観光化されたものであろうというさっぱりとしたあきらめをもちつつ、中心街からややはずれた昔ながらの町並みが残っている通りにはいる。その角地に目指すパブはあった。一階は通常のイングランドにもあるパブとあまりかわりはない。カウンターと、立ち飲み用の背の高いテーブルがフロアーに並べられている。入り口から



ブレの海岸

カウンターの横にある階段を上った二階は、一階とは様相が違  
う。角地ということもあり、西と南側には窓があり、明るい日  
差しが差し込んでいます。東側に備え付けられたカウンターでギ  
ネスを一杯注文し、西の窓際の席に陣取った。下の階とちがう  
雰囲気を感じ出している要因が二つある。一つは、西の窓際の  
一段高くなつたところに据え付けられているテーブル席と、そ  
こに座っている三人の男性が楽器を持っている点。もう一つは  
カウンターの前に、何やら広いスペースが確保されている点。

ギネスを飲みながら、楽器の調整をしている人たちを興味深  
く眺めている。すると、私以外に二人の客しかいないところに、  
40歳代と見受けられる夫婦が、十歳ぐらいの少年と共に入っ  
てきた。イングランドだと、このぐらいの少年がパブですること  
といえば、チップス（フライドポテト）かクリスプ（ポテト  
チップ）をコーラで流し込むくらいである。そのつもりでこち  
らも何気なく彼の方を見ていると、少し恥ずかしそうに、楽器  
を持っている人になにやら話しかけている。二言三言言葉を交  
わして、また親の元に戻っていった彼は、突然すつと背筋を伸  
ばして、誰もいないフロアーに進み出た。すると、楽器を持つ  
たおじさん連中も、彼の動きを察知すると、互いに目配せをし  
て、軽快なアイリッシュ音楽を演奏し始めた。フルートと、ギ  
ター、フィドルが繰り返す軽快なリズム。それに併せて、少年

がダンスを始めたのである。

アイリッシュダンスの歴史は、この島と人々の歴史と同じく、何ともいえない悲しみとたくましさで彩られている。一説によると、イングランドの支配下であった16世紀に、娯楽を禁止された人々がパブに集い、外から見られてもわからないよう、下半身だけで踊るといふ、この独特な踊りを編み出したというこ



市内の町並み

とだ。

少年がダンスを踊っている最中に入ってきた、隣にいるアメリカ人の陽気なおばさんが感嘆の声を上げる。彼は、近いうちに地元で開催されるダンスのコンクールに出場するのだそうだ。その出場にむけてダブリンという大都会で武者修行といったところなのだろう。

## 普段着

さて、二杯目のギネスを注文してまた席に戻る。演奏者のいるテーブルに、一人の若者が加わっていた。ちよつと太めで、だらしなくジーンズをはいた若者が、リーダーらしき人となにやら雑談をしている。

しばらくして、彼は自分のリックサクからごそごそとなか取り出した。無造作に詰め込まれていた物体こそ、私が待ち望んでいたものであり、彼こそが、アイリッシュ音楽の主役の一人であるイーリアンパイプの演奏者だったのである。普通のさえない青年が、楽器を持ったとたんに、物語の登場人物のように浮かび上がってくるのだから不思議である。神経質そうにリードのような部分の調整を行う。

私が仮にどんなに熟練したイーリアンパイプの演奏者だとし

ても、やはりこの場の登場人物には不似合いであろうという気がした。音楽は国境を越えるが、こうした日常風景の一部としての音楽を見てしまうと、完全にはとけ込めない、「文化」の見えない壁のようなものを感じてしまう。壁というよりも、文化という糸を紡いで作った、「伝統の普段着」を着ているというような印象である。普段着だから、「制服」のような威圧感とは与えない。人々の間で愛され、大切にされてきた、着心地のよさそうなアイルランドの風合い、肌触りが、見ている者に憧れと少しの嫉妬を抱かせる。

彼は、何度も何度もリードの調整を繰り返した。なかなか演奏をしない、このもつたいぶつたところが何ともかっこいい。このカツコよさは、比喩的にいえば文化の「普段着」を若者なりにダボダボのジーンズとコーディネートしていることからくるのだろう。つまり、伝統文化が、若者の日常にも何げなく溶け込んでいるのだ。曲の説明をすることもなく、聞いている人に愛敬を振りまくこともなく、自分たちの興が乗るにまかせて演奏をする彼ら。実際は時給制のアルバイトだと思われるが、地元のパブで夜な夜な繰り広げられるであろう、自然発生的な音楽の宴を十分に再現してくれた。



市内のギネス工場

そのまま最終のエクセター行き、飛行機に乗るために、空港行きのバス停を探して夕暮れの街を歩いた。フルートとバイオリンが奏でる複雑なリズムが頭の中で鳴り続けている。雲行きは怪しくなり、雨がぼつりぼつりと降り出した。鉛色の空は、こちらに来る前に思い描いていたとおりの、アイルランドの初冬の空模様である。バスの時間を気にしながら足早に歩いた。早速身につけていた、先ほど土産物屋で購入した定番のギネスのマフラーに汗ばんでいると、通り過ぎりの小さなバブから楽しげなアイルランドの普段着の音楽が聞こえてきた。

## イングリランド人と音楽

二泊三日のわずかな滞在期間中に、アイルランドの人々の音楽との幸福な関係を垣間見ることができた。では、イギリス人と音楽との関係はいかに。日本人にとって、イギリス人でなじみのあるクラシック音楽の作曲家は少ない。ドイツ生まれでイギリスに帰化したヘンデル（一六八五年生まれ）のほかには、イギリス第二の国歌と呼ばれる「威風堂々」を作曲したエドワードエルガー（一八五七年生まれ）がいる。

イギリス人にとってクラシック音楽といえば毎年開催される「BBCプロムス（プロムナードコンサート）」と呼ばれる世界

最大のクラシックの祭典であろう。一般の人たちにも広くクラシック音楽を楽しんでほしいという思いから一八九五年に始まったこのイベントは、イギリスの夏の風物詩である。八週間にわたるこのイベントの最終夜の模様は、日本でもお馴染みであろう。思い思いの服装に身を包んだ観衆は、クラツカーやホーン、風船、ユニオンジャックにイングリランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズの国旗を振りながら、クラシックの調べに合わせて体を動かし、音楽を楽しむ。普通のクラシック音楽のコンサートとは全く異質の光景である。この夜のハイライトに演奏されるのが、エルガーの「威風堂々」であり、続いて国歌である「ゴッドセイブザクイーン」、日本でも知られているスコットランド民謡の「蛍の光」である。

「歩き回る」という意味をもつ「プロムナード」から名付けられたこのコンサートは、文字通り立見席で自由に動き回ってもいい（当初は飲食も自由だったらしい）、という趣旨のコンサートとして始まった。現在ではあまりの盛況ぶりですべて自由に動き回るようなスペースはなく、人々が音楽に合わせて膝の上下動を繰り返す光景は、ある種異様である。クラシック音楽という権威のあるものを市民として楽しんでやろう、というのが、何ともイギリス人的な発想であろう。

テレビ中継される最終夜には、数年前から「各国（イングラ

ンド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランド」を衛星中継でつなぎながら一つの曲を演奏する、という企画が行われている。音楽が持つ、国境を越えて人々を結びつける機能を、文字通り実現しているこの企画は、なかなか感動的である。

## 非日常への鍵

さて、イギリス人の日常生活に音楽はどのように顔を出しているのだろうか。いわずもがなのビートルズを生んだイギリスにとって、音楽は重要な輸出産業でもある。テレビの音楽番組は非常に人気が高い。バンドをやっている若者も多いようで、私の住む小さな町にも楽器屋さんや演奏スタジオがいくつもあつちなみに日本でも人気の高い「コールドプレイ」というバンドは、私の通うエクセター大学出身である。

ところが、若者文化や消費するための音楽以外、つまり参加する音楽はあまり見られない。アイルランドとおなじケルト文化の系譜をひく、ウェールズやコーニッシュの人々の間では、民族音楽のようなものが受け継がれているようである。私の英語の家庭教師は夫婦ともに歌が大好きだが、それはウェールズ出身の御主人とコーニッシュの奥さんというカップルということが影響しているのかもしれない。

当然例外はある。まず思いつくのがサッカーのチャントと呼ばれる応援歌である。イングランドのチームが劣勢の時に、自然とわき上がるように歌われる「ゴッドセイブザクイーン」は、理由もないのに感動的である。昨年度のワールドカップを大学の食堂のテレビで観戦した際に聞いた地鳴りのような歌声を今でもはつきりと思い出すことができる。

もう一つ。イギリス人は、カラオケ好きである。パブでは、普通毎週木曜日が「カラオケナイト」である。すっかり英語として定着している「Karaoke」という言葉は、一九七九年の「Awardyear」というその年を代表する「言葉」として選ばれている。ちなみに最近では九八年に「Google」、二〇〇一年「9/11」が選ばれている。二〇〇二年には「metatarsal」という言葉が選ばれている。「中足骨」という足の骨を指す言葉である。この言葉の選出理由は日本と関係が深い。二〇〇二年に開催されたサッカー日韓ワールドカップ、本大会直前に怪我をしたイングランド代表チームキャプテンのベツカムが折った骨が、この中足骨だったのだ。それから四年後の二〇〇六年ドイツ大会。四十年ぶりのチャンピオンに、という人々の期待を一身に背負った若きエースストライカーのルーニーが折ったのもまたこの「中足骨」であった。四年ごとに新聞の見出しにこの言葉が躍ったのである。話がだいぶそれた。その当時の状況

はよくわからないが、いずれにしてもその年の出来事を表す一語として選ばれるほど、イギリス人にとってカラオケはなじみが深いのであろう。

## フェアプレイの精神

ではなぜこうまでしてイギリス人にカラオケは溶け込んだのであろうか。そのことを考えてみると、音楽とのつきあいからからも、なにやらイングランドとアイルランドの違いが垣間見られるような気がする。私の勝手な解釈だと、カラオケという決められたシステムの中でなら、イギリス人は「自由」に羽目を外すことができるのだろう。

イギリスでも、どの国でも同じだと思うが、若者たちの間ではBingedrinkといって、飲み騒ぎの習慣がある。ところが大人たちの間では、日本でみられるようなアジア的な、酒を飲んで、酩酊しながら渦を巻くように盛り上がっていく、という宴会文化がない。飲んで、知らない人同士が肩を組みながら歌謡曲を聴く、ということがない。

アイルランドでは、日常と「非日常」が連続的に存在している。だからこそ、それまでパブで飲んでいたおじさんの興が乗ってくれば、そこにある楽器をひつつかんで演奏し、歌って

しまうのである。

一方イングランドでは、日常と「非日常」には段差があり、その段差を越えるためには何らかの「社会的」な「後押し」が必要になる。人前で歌う、ということはイギリス人にとっては「非日常」なのだ。「カラオケ」という東洋からやってきた機械が、慎み深いイギリス人の背中を押したのだ。このシステムの中でなら、慎み深さのベールで包んで見えないように腹の中にしまいこんでいるイギリス人のお茶目で目立ちたがりな本質が、ぬつ、と顔を出すのである。

しかし、乗り越えた「非日常」の中にも、暗黙のルールがなければ、イングランド人は安心して楽しめない。たとえ毎週繰り広げられる「カラオケナイト」が、怒号とアルコールで渦巻く混沌のように見えても、他人との距離感を重んじるイギリス人独特の価値観、見えないルールがカラオケナイトの根底にはしっかりと流れているように感じる。「カラオケ」というお揃いの「ユニフォーム」を着たうえで、フェアプレイの精神で羽目を外しているのである。そう考えると、先ほど紹介した「プロムナード」も「服装も行動もクラシック音楽にふさわしくなくふるまうべし」というルールにのっとった、イギリス式羽目はずしの典型例かもしれない。

この「非日常」のなかでのフェアプレイのもつとわかりやす





ダブリンから西に向かう列車

い例はクリスマスに目撃される。クリスマスにはいくつか「ルール」がある。本番である25日になると、やや遅めの昼ごはんとして、クリスマスディナーと呼ばれるロースト料理をたらふく食べる。その時には、全員紙でできた王冠をかぶり、用意された「なぞなぞ」を出し合うのが決まりだ。その後、クインが行う演説を聞き、お酒を飲んで、お菓子を食べる。決められたルールにお揃いのユニフォーム。研究所のクリスマスパーティーで、へんてこな紙でできた王冠を付け、致命的につまらないクイズに、喜々として興じる研究者の群れ。まさにフェアプレイ精神にあふれている。

◆ ◆ ◆  
普段着のまま日常と非日常を行き来するアイルランド人と、ユニフォームに着替えて、非日常を楽しむイギリス人。話がアイルランドの音楽から始まり、イギリス人（イングランド人）論につながったようだ。以上、私の勝手な考察である。